

海野 聡著

再生する延暦寺の建築

信長焼き討ち後の伽藍復興

今も多くの参拝客が訪れる比叡山延暦寺。この日本屈指の名刹の魅力はさまざまだが、深閑とした伽藍の威容とそこに立つ多様な建造物もその一つだろう。長い歴史を感じさせるこの景観が、織田信長による焼き討ちという大事件を経たものであることは周知の事実であるが、現在の佇まいにある種の落ち着きがあるせいか、現状と焼き討ちの間に存在する復興過程に思いを馳せる訪問者は少ないのではないかと。

本書は、近著『森と木と建築の日本史』(岩波書店、二〇二二年)などを著して日本の建築史をリードする著者が、副題そのままに焼き討ち後の延暦寺の再生過程を丁寧に追った力作である。再生といっても論ずべき点が多い。新造か修理か、移築されたものなのか、規模は伽藍全体に及ぶのか、建造物単位なのか。復興を計画したのが誰で、どんな意図を込めたか。その後も伝統を重んじ



A5判・316頁・3850円
吉川弘文館
978-4-642-01668-1
TEL. 03-3813-9151

る儒教思想により、新造よりも修理を基本とした綱吉期や、廃仏毀釈以降の近代復興期に分析のメスが入られる。民間パトロンが近代的な新風を吹き込むものの、移築や古材利用が結果的に景観を急変させなかったといふ。本書後半では、延暦

“復興”が示す数多の問いと仕掛け

業績重圧の学术界にも一石を投じる力作

衣川 仁

その都度の理念や意図、あるいは社会状況がどうあるかは進ませなかった。その一気呵成ではな

い復興のあり方そのものが現在の景観をもたらしたのだと著者はいう。このように、本書が論

じるのは復興にあたってどんな建物に変わったかというところだけではない。そこに込められた理

念や意図、つまりあるべき規範の問題であり、またそれらに沿って仕掛け

られた意匠や構造、建築手法などの建築史的な問題であり、さらには復興

を複雑化させた社会状況や歴史的環境の問題であった。あるべき規範の問題と社会状況が建築に及ぼす影響の関係、たとえ

ばどちらがより強い影響を及ぼしたのかなど、文献史学からの興味も尽き

ない論点が多く、丁寧でありながら刺激的である。豊富な写真や図面を

みながらじっくりと読んでほしい。最後に、ここまでやたら「意図」「仕掛け」と

強調したのは、著者が本書の出版に仕掛けた意図に触れるためである。延暦寺で実施された建造物



総合調査の報告書を再構成した本書の「丁寧」に追った力作「ぶりはそこに由来するのだが、こうした調査は地道なものであり、目に見える業績からは遠くものに見えてしまふ。特に若手の研究者は、目に見える業績を出せという重圧に迫られ、狂走ながら豊かな成果に結びつくであろう基礎的な調査研究を避ける現状もあるという。著者が「報告書の書籍化」という「仕掛け」に込めたのは、調査と業績の間隙に一定の道筋をつけたいという思いである。地道さと丁寧さを要求される調査研究という向き合うか、学問の規範とは何かという問いが重く残った。(きぬがわ・さとし) 徳島大学教授・日本中世史)

★うんの・さとし 東京大学准教授・日本建築史。二〇〇九年、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程を中退。二〇一三年、同研究科にて博士号(工学)を取得。著書に『建築物が語る日本の歴史』『古建築を復元する』など。一九八三年生。